
真実とは。

トラナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実とは。

【Nコード】

N7123X

【作者名】

トラナ

【あらすじ】

幼くして突然、母を病気で失ってしまった姉けいこ、弟あきと。その母からの遺言ともいえる一枚の紙切れから、最期の贈り物を受け取る。しかし、その贈り物は見知らぬ一人の名前が書いてある一枚の紙切れだった。果たしてその母からの贈り物とは、いったい何であるのだろうか……。けいここと、あきとの姉弟生活。フィクションホームドラマ。

一枚の紙切れ

「誰にも譲れないもの」。そう聞いて、今現在あるという人、そうでない人、または何だそれは、などと、人はそれぞれいろいろ考えることと思う。あるという人で例えるなら、それは肉親であったり、恋人、友人など、自分にとって大切な人のことを挙げる人もいるだろう。またある人は、金や物、地位、さらに名誉や自分自身の顔や身長、性格といった個人の持つ特徴を主張する人もいるだろう。さらには、何それわかんないと、とりあえず言ってみた人であつても、よく尋ねるなら、それはつまり個人の持つプライドのことでしょう、と素直に答える人もいると思う。いずれにせよ、それらは私にとってこの小説を書くこうと思つた原点に繋がる。それは、今の生活の中、個人にとつてまさに、そこを主張する力が薄れているように感じられるからである。その人本来ある、素直な気持ち、またはプライドが実は何かの力によつて後回しせざるを得ない状況になつてしまつたのではないだろうか、と思つたからである。このように、もしそのようなのであるならばという思いが強く出てきたため、今回執筆に至つた次第である。では、このままだと小説に入らず一つの論文になつてしまう可能性が出てきたため、そろそろ本編（短編小説）を始めていこうと思う。

夕暮れ時、けいこは一人歩いていた。稲刈りを終えたトラクターは、がたがたと音をたてながら車庫を目指していた。山から差し込む夕日に、反射したオレンジ色の水たまり。ぱたぱたと音が聞こえそうなほど、大きな羽をしたトンボ達。しんと流れる川のそばでは、りんりんとうめくコオロギ達。けいこはそれらと、まるで会話をしているかのように時々笑ったり、おどけたりしながら家路に着いた。家のドアを開ける頃には、すでに辺りは薄暗くなつていた。

「ただいま。」といつも通り、比較的大きな声で家の中に入っていた。しかし、いつもは聞こえてくるはずなのに、いつまでたっても母親の「おかえり」の声がしない。もう一度言うのもなんだし、とりあえず家の中に入ろう、と靴を脱いで廊下を歩いた。すると、まだかすかに夕日が差し込む居間で、弟のあきとがうつむいて座っていた。けいこは「何よ、あき。いるなら返事くらい・・・」と言いかけたところで、異変に気づかざるを得なかった。弟のあきとは、すすり泣いていた。けいこは弟が泣いている向こうに、畳の上の布団に白い布を顔に被せ、仰向けに横たわっている何かをみつめた。それが、母親であることに気づくのに、そう時間はかからなかった。けいこのひざは、自分でも知らぬ間にがくがくと震えだし、終いには全身に伝わっていった。弟に何か問いかけようにも、声がほとんどでない。「あ、あ、あ・・・」と。口がたがたしながら、ペタンと空気が抜けたタイヤのようにその場に座り込んでしまった。かすかな夕日に照らされた一粒の涙が、畳の上で跳ね返ったように思えた。その夜二人は、母親の名を大声で叫び続けたのだった。

母が亡くなるという突然の出来事で、近所に住む普段あまり付き合いのない人達が集まり、皆一見真剣そうな会話をしながらも、その子供を横目に見やりながら、その中の一人がけいことあきとに、「葬式をしないとは、何あほな事を言っているんだい、あんたらは」と、右の眉毛をひくひくさせながら、ある年配の女性が二人に言った。二人はその言葉を聞き、いったんそれぞれ顔を見合わせたが再び下を向いて黙った。しばらくすると、姉のけいこがうつむいたまま、「骨は川へ。骨は川へ・・・。」と小声で繰り返していた。それを横目で見ていた弟のあきとも、姉の様を真似ながらぼそぼそと「骨は・・・。」と言った。すると、その近所のある人が、「この辺りでは、死んだ人は土の中に埋めることになっているから、それは無理な話だよ。」と諭すように言った。しかしそれでも二人は、その言葉をまるで呪文を唱えるかのようにぼそぼそと、ただただ繰

り返すだけであつた。

結局、二人の意見が通じたのか、それを見ていた近所の人達が折れたのかどうか定かではないが、母の遺骨は川へ流すことになった。その当日、けいこ、あきと、おじ夫婦の四人以外、誰も参列者はいなかった。けいこことあきと二人は、「せーの」と同時に橋の上から両手をかざした。小さな掌の上にあつた母親の遺骨は自然に吹く風によつて、次第にきらきらと形を残さず消えていった。その様子を見て、おじ達は二人に、「また近いうちにいくから。」と言ひ残し、その場からさつさと立ち去つて行つた。残された二人は、しばらくその場で立ちすくんでいた。どのくらいそうしていただろう。気づくと、陽はすでに暮れようとしていた。それはまるで先日、けいこがトンボ達と戯れながら帰宅した時を思い出すような情景だつた。それにとつさに気づいてしまったけいこは、慌ててあきとに「あき、これからどうしようか。」と、自らの思いをかき消すかのように言つた。弟のあきとは、つま先をとんとんと打ちつけながら、「お母さんは、この川が好きだつたよね。お姉ちゃん。」と、突然言ひ出した。けいこは、あきとに聞いても仕方ないかといった表情で、少し下を向いておし黙つていた。するとあきとは、にこつと笑ひながら一人でこう続けた。「夏休みにさ、三人で魚とりに行つたね。あの時、お姉ちゃんはこちらでびしょ濡れになつたんだよね。」と、けたけた笑ひながら、けいこに問いかけた。けいこは、「ねえ、あき。聞いてるの。本当にどうしようか。おじさんの家に行こうか。」と、苛立ちと焦りを少し抑えながら口早に言つた。するとあきとは今までの笑顔から一転して、「僕はもうちがいい。」と静かに呟いた。それを聞いたけいこは、なんだかすっと急に胸が軽くなつたよう気がした。あきとは続けて、「お姉ちゃんは、どうしたいの。」と尋ねた。するとけいこは、「お姉ちゃんもその方がいいと思つてた。」と、笑顔で弟に答えた。あきとは、自分と同じ気持ちでいた姉に対してうれしく思い、その手をそつと握つた。けいこも、それ

に答えるかのように、優しく弟の手を握り返した。そして二人はそのまま手をつなぎながら、時には前後に大きく揺らして家路を急いだ。二人で生きていくんだ。そう、お互いが心に決めた瞬間だった。幼い二人にとつては、とてつもなく大きな問題だった。しかし、心のどこかで大丈夫と二人は少しだけ思えてきた。そして気づけば、辺りは急に暗くなっていた。

それからしばらくは、姉であるけいこが幼いながらも、炊事、洗濯、掃除をこなした。いや、こなしたというよりか、こなさなければならぬ状態だった。そして今日、掃除をしている時のことだった。何気なくたんすの戸をけいこがあげた時、偶然にも一枚の白い封筒を見つけたのだった。そこには、「けいこ、あきとへ。」と書いてあった。それを見てけいこは、一瞬うれしくて飛び跳ねそうな気持ちを抑えつつ、返って恐る恐るその中身を広げてみた。すると封筒の中には、母親の見慣れた文字でこう書いてあった。「二人がこの手紙を読んでいる時には、おそらくお母さんはいなくなった後でしょう。寂しい（さび）思いをさせてしまつてごめんね。これから大切なことを書いておくからよく読んでね。まず、けいこへ。あきとの面倒をよくみてやつてね。けいこは、お姉ちゃんだからきつと大丈夫。大変な時でも、けいこならきつと幸せにあきとと暮らして行ける。あきとへ。お姉ちゃんの言うことをよく聞いてね。あきとは男の子だから、大きくなつたらお姉ちゃんを支えていつてね。二人とも、元気でいてね。いつまでも、めそめそしないでね。お母さんは、いつでも二人を見守っているからね。それから、土間のくぼみをあとで見てね。家の貯金と、二人への贈り物が入っているよ。最後に……。」「と、ここまで読んでいると、その下はけいこあきとの涙でぐしょ濡れになつてしまつていた。なんだかお母さんが今ここにいるかのように問いかける、その文字一つ一つがなんとも言えず、たまらなかつた。

その手紙を読んでから、さらにけいこは毎日頑張った。朝は四時半には起きて家事一切をこなしていた。夜は、二人とも九時前には床に就いた。そして週末は、幼い子供達を一応心配しているということから、母方の兄とその嫁が家に来る。しかし、けいこあきとは昔からよく思っていないこともあり、息苦しく感じながら生活していた。何故二人がそう感じていたかという、その母親の兄と嫁が来る時は、夕飯の支度は兄嫁が作るため必要ないのだが、その夕飯の後に兄の酒盛が始まる。それは夜10時を過ぎても落ち着かず、子供達にしてみれば夜中まで酒を呑み、あれやこれやと会話をしているのが大人なのかと、いささかがっかりした気持ちを思い出していたからだ。ただその親戚が来ることによって二人には、金銭的な余裕は少し生まれたが、逆に変な疲労が残った。けいこ達は、仕方なく考える他なかった。

昨夜は夜中の12時頃まで、大人達の話声がけいこの耳には聞こえていた。あきとはその間、ぐうぐうと寝息をたてながら始終眠っていた。けいこは突如、明日は6時まで寝ていようと思い、目覚まし時計の針をセットしなおした。しかし、結局一旦6時に起こされたもののあまりの眠さから、なんだかんだ7時頃まで眠ってしまった。しかしけいこは再び、はっとして時計を見た。すると、とつくに7時を回っていたので、慌てて飛び起きた。大人たちはまだ寝ているのか、家の中はしんとしていた。洗面所で顔を洗ってから、足早に台所に向かった。するとそこには、長い髪をゆらゆらしながら後ろ向きに立つ女性がいた。そしてその女性が、けいこに気づくとゆっくり振り返りながら、「おはよう。」と言った。けいこは聞き慣れた声と、そのうしろ姿にすぐさま反応した。「お母さん。」けいこは、まさかと思いながらも必死に目を何回も擦り、さらにはその立っているお母さんめがけ、もうすがりつくような思いで流台まで全力で走った。あと少し。もう少しで、あの母の温もりに辿りつける……。その一歩手前で、ふっと瞬時に跡形もなく消えて

しまった。そしてそこに残っていたのは、母の確かな残り香のみだった。けいこは、「お母さん、お母さん。」と何度も呼んだが、それきり何も起こらなかった。その騒ぎを聞きつけ、おばがやってきた。「いったいどうしたんだい。」と、いかにも不機嫌そうなおばが、けいこに言った。けいこは、目を丸く見開いたまま、「い、今、お母さんがいた。」と、いささか興奮気味に伝えた。おばは、「お母さんだって。夢でもみてたのかい。朝ごはんは私が作るから、もう少し寝てらっしゃい。」と、半分呆れたように言った。けいこは、夢でも見てたのかと自分自身に問いかけた。しかし、顔を洗った時に拭ききれなかった水が、まだ首元で濡れている。このことから、「これは、夢なんかじゃない。」と、心の中で一人確信していた。そしてこの出来事は、これからの不思議な日々の始まりであった。

けいこはそれから度々、母を感じることが出来た。ある日は、誰もいない自宅に着き玄関を開けた時、あのいつもの香りがした。それだけでも、幸せな気持ちになれた。「ただいまあ。」とその目には、うつすらと涙を浮かばせながら、無理に元気よく、声を張り上げてみたりした。しばらくすると、「ただいまあ。」と元気よく、弟のあきとが帰ってきた。返事がないのであきとは、台所で食事の準備をしている姉のそばまで行き、もう一度大声で言った。するとけいこは、弟に気づかれぬよう涙をぬぐいながら笑顔で「おかえり。」と静かに言った。あきとは、「・・・お姉ちゃん。」と、一瞬、いつもと雰囲気が違う姉を感じ取ったが、すぐさま続けて、「そういえばお姉ちゃん。お母さんの言っていた贈り物ってなんだろうね。」と、首をかしげて、右手をあごの下で握りながら言った。それを聞いたけいこは、はっとして、「そうだ。忘れてた。」と、洗っていた食器を無造作に台所のシンクへ投げ入れ、慌てて水道の蛇口をひねり、それと同時に土間に向かって小走りで行ってしまった。あきとも、すぐに後を追いかけた。土間の隅に大きな柱があり、その横には野菜や米など食料を保管しておくためのくぼみがある。その

中にあつた古いつぼを見つけるとけいこは、預金通帳と印鑑、一枚の紙切れを取り出した。紙切れには、なにやら漢字で名前が書かれていることは二人とも理解できたが、果たしてそれが誰なのかまったく検討がつかなかった。二人とも、なんだかがっかりした様子でどつと疲れてしまい、言葉少なに「今度、おじさん達が来たら聞いてみようか。」と言った。「贈り物、楽しみにしてたのに・・・。」と、あきとは今にも泣き出しそうだった。それを見てけいこは、自分もがっかりしてはいたけれど気を取り直して、「さ、あき。ごはん食べよつか。」と、あきとの手を引いた。少しぐずぐず言っていたあきとは、姉に手を引かれながらも、しぶしぶと台所へ戻った。しかし、改めて食卓を覗き込んだあきとの表情は、それまでとは一変した。その日の夕食は、いつもより豪華であつた。姉のけいこは、母親をよく助ける子供であつたのでほぼ毎日、一緒に食事の準備をしていた。そのため一通りの献立はもちろんのこと、少し手の込んだおかずも作れるようになっていた。本日の献立は、ミートスパゲティー、鶏肉のソテー、みず菜のサラダであつた。あきとは、先ほどまでとは打って変わった様子でにこにこしながら、「ね、ね。お姉ちゃん。もう食べていい。」と、姉に尋ねたと思いきや、ほぼ同時にフォークに巻きつけていた大人の口でちょうど一口分くらいを、小さな口へ押し込むように食べ始めた。けいこは、そうした弟の様子を見ていたら、なんだか可笑しくなり、試しに自分も同じような食べ方を真似てみた。すると、あきとはむっとした表情で「真似しないですよ。」と、言おうと思つた。しかし、もうすでに口にはいっぱいスパゲティーが詰め込まれていたので、実際には、「まにえしゅにやいべよ。」と、なんだかはつきりしない発音をした。それを聞いたとたん、けいこは、いよいよ笑いを堪えきれなくなり、「きゃはははは。」と、声を出して笑つた。一度笑い出したけいこは、その後あきとが何を言つても可笑しくなり笑い続けた。あきとは、最初は笑われてむっとしていたが、姉が久しぶりに笑っている姿を横目でみてみると、なんだか自分も徐々にうれしくなってきた。そ

してそのうち姉と一緒に、近所に響くほど笑いあった。

翌朝、おじ達がいつものように歩いてやってきた。おじ達の家は、けいこ達のところからさほど遠くないところにあるのだが、子供達が歩いていくには少し距離がある場所に住んでいた。共に家の中に入り、お茶を用意するために台所に向かう途中で、けいこは思い出した。すると、仏壇に置いてある母からの紙切れを手に取り、「この紙切れがあっただけど・・・。」と、けいこはおじにそれを手渡しながら言った。おじは、どれどれと言いながらそれを見た。するとおじは、一瞬「あつ。」と思わず、声をもらした。けいこは首を傾げて、あきとも近くに寄ってきた。二人は不思議そうな表情を浮かべながら、おじの顔を見つめていると、おじは、ふうと一息ついた後に、「この名前は、お前達のお父さんだ。」と、こちらを注目している二人に告げようとした。しかし、実際におじから出てきた次の言葉は、「さあ、誰なんだろうね。」と、落ち着かない様子で答えた。それを見ていたおばも、おじの様子を察しその紙切れを覗き込み首を傾げて、「知らないなあ。心当たりもないし・・・。」と、大人二人は嘘をついた。それを聞いていた、けいこはあきとは、母がくれた贈り物の意味がますますわからなくなっていた。あきとは、おじ達に、「ねえ、この字はなんて読むの。」と尋ねた。するとおじは、少し渋ったような声でこう言った。「総重 勝巳。」すると、あきとは、「そうじゅうだつて。変な名前。」と姉に言った。けいこは、「人の名前を変とか言っちゃだめだよ。あきとがもし言われたら嫌でしょ。」と尋ねるとあきとは、「うん、わかった。もう言わない。」と、舌を少し出した後言った。その様子を見たけいこは、「この辺りでは、聞かない苗字だね。」と、大人二人に問いかけた。おじ達は、ううんと言いながらあいまいな返事をした。けいこは、もうこれ以上この人達と話しても何も情報は得られそうにないと思ったのか、「うん。ありがとう。」と礼を言い、続けて「これからは、困ったことがあったら相談します。だから、毎週は

来なくて大丈夫ですから。」と、真剣な表情で伝えた。おじ達は、
なんだかいたたまれない気持ちになり、けいこの申し出を受け入れ
た。そして、お茶を飲み終えた後、大人二人は肩を並べて自宅へ帰
っていった。

一枚の紙切れ（後書き）

母からの贈り物が、今後二人にどのような事をもたらすのだろうか・・・。
次回、「贈り物と二人の子供達。」お楽しみに。

贈り物と二人の子供達？

少し肌寒くなつたきたある朝のことだつた。けいこは、いつものように食事の用意をしていた。「そろそろあきとを起こさないとい・・。」と、目玉焼きをしたフライパンの火を止めて寝室へ向かつた。いつものように敷布団からはみ出しているあきとは、首を斜めに傾けながらまだ眠っていた。けいこは、慣れた様子で「ほら、もう起きないと朝ごはんなしだよ。」と言いながら、あきとの掛布団を引っ張り言つた。「ううん・・・。」と言いつつ、欠伸をしてあきとは「もう、お姉ちゃん。まだ早いよう・・・。」と、いつものように言い、目をこすりながら起きてきた。けいこは、「顔洗つたら、朝ごはんにしようね。」と、笑顔で弟に言つた。あきとは「ううん。」と言いながら、洗面所へふらふらと向かつて行つた。

顔を洗つて食卓へ来たあきとは、まだ眠そうな顔をしていた。そして目を薄開きにしながら、姉の用意した朝食を見つめていた。けいこは、弟が席についたのを見て「さ、食べよう。」と、箸を手にとつた。そしていただきますと言ひ、食事を始めた。あきとは自分の席についたものの、まだ時折まぶたが閉じそうになり、うつらうつらしていた。けいこはそのような弟を横目で見て少し微笑みながら、一人で黙々と食事を進めていた。すると、あきとは、むくりと上体をゆっくり起こして箸を手を持ち、しばらくするとぱくりぱくりと食べ始めた。目は半開きのままである。ちょうどその時、玄関の方でがらがらと音がした。二人ともほぼ同時に食事の手を休めて音がした方を見ていた。数秒たつた後「おおい、おおい。」と、低い大きな声がした。二人とも驚いて、いったいなんだろうと顔を見合わせていた。するとあきとは、大きな声がしてはつと目が覚めたのか、やけにさっぱりした顔で「お姉ちゃん、お客さん。」と言つた。けいこは、そうみたいねと言ひながら、持っていた茶碗をテー

ブルに置き、はあいと返事をしながら玄関の方へと向かっていった。

玄関には、中肉中背で白髪交じりの男が腰掛けていた。その男は再び、けいこが玄関に現れる少し前に「おおい、いるかい。」と、姿に似つかぬ声を張り上げた。けいこは急いで駆け寄り、玄関にいるその男の顔を見た。やつぱり知らない人だと思ったが、なぜか不安な気持ちは幾分落ち着いていた。こんなに朝早くの来客は、身内以外では滅多にない。けいこは、その男の姿を見るとすぐさま「いったいどちらさまですか。」と、いくらか強い口調でその男に言った。するとすぐ、「どちらさまでえすかあ。」と、素っ頓狂な声が出た。あきともまた、姉の後をついてきていたのである。その二人の様子を見て、初老の男は険しい表情で「何んだと、おい。どちらさまだと……困ったもんだ。」と、静かに言った。それを聞いてけいこは、「困るのはこっちの方だよ。」と、心の中でぶつくさ言った。この男は、ひょっとして母に用事があるのかもしれないと、つつさに思ったけいこは「あおう。母は先日亡くなりましたけれども……。」と、一応伝えた。すると男は、「……。」と、少しうつぶし黙った。しばらくして、「まあ、ちよつと休むとするか。悪いがお前ら、この荷物を奥まで持つて行ってくれ。」と男は、ぶつきらぼつな口調で二人に言った。それを聞いたけいこは、とたんに何かが吹っ切れたかのように、「知らない人は、家に入れません。」と、きつぱりその男に向かって言った。そしてあきとも「はいれません。」と、大きな声で続けた。すると男は、「はあん、なんだお前ら。俺はお前らの母親も、お前らも知っている。だから安心しろ。いいからとにかく少し休ませろ。疲れているんだ、俺は。」と言い靴を脱ぎ、よつこらしよと言いながらゆっくり立ち上がり、居間へとこのさのさ向かっていった。二人は、「何だ、このおじさん」とそれぞれ思い、大きな声を張り上げようとした。しかし、ここで騒ぐとかえって危険であるような気がした。けいこは、あきとにそつと口元を塞ぐしぐさをして合図を送った。意外と姉の言うことは

聞くようになったあきとは、姉と同じようなしぐさを真似た。母の知り合いのような事を言っているし、とりあえずここは、この男の言うようにしておこう、と二人は目で確認しあった。

荷物は大きな風呂敷と、小さなスーパーの袋の一つづつなので、それぞれ引つ張るように居間へと運ぼうとした。けいこは風呂敷を引つ張りながら持ち上げてみよう、と、少し宙に浮かした。その時、一枚の写真が二人の前にひらひらと舞い降りた。けいこはその写真を、何気なく拾い上げ覗き込んだ。そこには一人の若い女性が、赤いヘルメットをかぶりバイクにまたがって親指を突き立てている様子が写っていた。なんともいさましく、しかしどこかで悲しそうな眼をしているのが印象的だった。居間へと歩きながら、何気なく後ろを振り返った男がそれに気づくと、けいこの手からそれを無理やりひったくるようにして、「いいからさっさと運びやがれ。」と、怒鳴りつけるように言った。けいこは、ぶつぶついいながらまだ途中だった荷物を、しぶしぶ引つ張って居間へと運んだ。その男は顔を幾分赤く染めながら、その写真をそそくさと着ている上着の内ポケットへ突っ込んだ。

贈り物と二人の子供達？（後書き）

突然、家に入りこんできた初老の男。 いったい何者なのである
うか。 次回、「贈り物と二人の子供達？」 お楽しみに。

贈り物と二人の子供達？

やがて夜になった。二人の子供達は、あの初老の男についてお互いどう思うか、それぞれ考えあつていた。けいこは夕食の準備をしていた。あきとも、寝室の準備をしながら、お互い何かを不満に思う気持ちを抑えてそれぞれ働いていた。ただあきとは、食卓に来て「お姉ちゃん、あの人。これから一緒に住むのかなあ。」とスキップしながら近づいてきて、どこか嬉しそうに姉に尋ねた。ちょうど夕食を作り終えたけいこは、そんなあきとの顔にあと数ミリという所まで近づき、「いやよ。あんな人必要ないわ。何よ。いまさら大きな顔をして、父親だなんて言われたってピンとこないわ・・・。」と、冷静に幾分大人びて答えた。実は、昼間の騒動の後、その男がいまいち反応がない子供達を前にして、「まだぶつくさ言っているのか。いいか、よく聞け。俺は、お前らの父親だ。」と顔を赤らめながら叫んでいたのだ。

「おおい、風呂上がったぞ。お前達も入ってしまえ。」と、風呂場の方から男の声がした。もうすでにこの家の主人だと言わんばかりに、二人を「お前達」と呼ぶ始末。それを聞いたあきとは、即座に「まだいいや。」と返事をした。けいこは、テーブルの上に煮付けた魚の入った皿を、ぴしゃりと置いた。「何だ、入っちゃえばいいのに。」と、その男は風呂から出てきて、腰にバスタオルを巻きつけ頭をハンドタオルで拭きながら言った。そして食卓を見て、「お、なかなかうまそうじゃねえかい。とりあえずビールでも飲むか。俺が持ってきたビール袋に入ってるだろう。ちょっと出してくれ。」と、洗い物をしているけいこに言った。けいこは、「冷蔵庫に入ってますけど。」と、これまたぴしゃりと言いつつ放った。すると男は、「何をぴりぴりしてやがる。なかなか気が利くじゃねえか。さすが俺の娘だ。ははは。」と、上機嫌で冷蔵庫を開けてビールを一本取

り出しながら言った。けいこは、さすがに頭にきたようで「いきなり家に来て父親だなんて……。いったい、誰が信じると思うの。おじさん達に電話してみるから。」と、半分泣きそうになりながらも、必死に伝えた。男はその言い分に身じろぎもせず、「まあ、待てよ。俺は、別に誰に電話してもらっても一切構わないがな。ただ、向こうも実は迷惑なんじゃないのかい。どうなんだい。」と、けいこの顔を覗き込み、意味深に答えた。

それを聞いたけいこは、何故か冷静さを取り戻していた。待てよ。そういえばおじさん達は、母の葬儀の時や、週末に家に来る時も、なんだか仕方ないからという雰囲気が漂っていたなあと、男の話を聞いてわかる場所があった。そのため、けいこは男を睨み付けてはみたけれども、少し眼を伏せて唇をかみ締めながらしばらく黙っていた。すると男は、「な。大人はよ、そういう奴も中にはいるんだよ。実際、わかる場所あるんじゃないのかい。」と、にやにやして、煙草に火をつけ言った。そしてふう、と煙を吐き出した後、続けてこう言った。「だから電話してくれたって、俺は全く構いやしねえよ。ただ、俺がお前達にここまで言っているのにさ、それでもこいつは信用ならねえというのなら、お前らのおじさんだろうが誰だろうが、お前達、勝手にどこへでも電話すればいいだろうさ……。」「けいこは、この間のおじ達の行動や言動を思い出していた。実際、食事を用意してくれたり、金銭的にいくらか余裕が生まれたこともあったのは確かだ。ただ、あの紙切れの名を見た時の不自然さは、どうも信用ならないと今、男の話を聞いていて確信した。けいこは、「そう……。確かにわからないでもないな……。」「そのけいこの様子を見て、男はさらに、にやりとして「そうだろう。わかればいいんだよ。ははは。」と、ビールを一気に飲み干した。そして煙草を大きく吸い込み、ふうと一気に吐き出した。その夜、二人はなかなか眠りにつくことが出来なかった。

贈り物と二人の子供達？（後書き）

母からの贈り物は、やはりこの初老の男のことであるらしい。少しだけ、その男に理解を示し始めた二人。今後三人で、いつたいたような生活を送っていくのだろうか。次回、「いそうろう。いや、父親でそうろう。」お楽しみに。

いそろろ。いや、父親でそろろ？

そしてそれからの日々は、毎日その父親と名乗る男は昼間から酒を呑み、けいこが夕食の仕度を終える頃には眠っているという生活が続いた。朝、男は薄い毛布をぶつきらばうに放り投げ、台所へ行きばしゃんばしゃんと自分の顔を洗う。その後、庭へ行きその様子を眺めながら縁側で酒を呑み始める。昼過ぎになり、いくらお腹が減ってくる。台所へ行き、戸棚を開くと材料がある。しかし、自分で調理する必要があるものばかりなので、面倒くさくなり、再び酒を煽り空腹を紛らわせ寝てしまう。そういう生活を送っていた。

そうした日々がしばらく続いていた。子供達は、始めの頃は様子を見ていたが、男のことはもうすでにどうでもよくなりつつあった。なぜなら、二人が家に帰ると父親が縁側で、「ぐこ。ぐこ。」と、いびきをかいて眠っている毎日であつたから。そのためけいこ達は、そういう状態にいくら慣れてきていたのだ。最近のけいこは、「あ、またいそろろが眠ってる。」と、男がいるところを、平気でそう言いながら通り過ぎて行くほどだ。そんなある日、いつものように酔っ払っている父親は、子供達が何も言わずに通り過ぎた時、寂しそうにこう言った。「お前ら。まだ俺を父親だと信用してないんだな。まあ、酒ばかり呑んでいる、単なる居候くらいにしか思っていないんだろ。どうせ……。なあ、少しは俺に頼ってきたらどうなんだい。」すると、あきとが落ち着いて、「酔っ払っているのに、よくそんなことが言えるね、おじさん。」と呟いた。「おじさん」実の息子に言われたこの言葉を、男は何度も何度も胸の奥で繰り返さなくてはならなかった。するとそのうち、子供達に對して怒りが込み上げてきた。男は、酒の力も借りたのか、あきとの首根っこをわしづかみにし、自分の方へ引き寄せた。「やめてよ、あきとに何するの。」と、けいこは驚いて叫んだ。ただ男は、「お

じさんとは何だ。父親に向かって、おじさんとはいったい何なんだ。」「と憤慨して言った。あきとは、男の音量と行動に驚いて、ただ身震いしていた。男が再び「何なんだ。ええ。」と、あきとに詰め寄り再び言った。あきとは小さな声で、「ごめんなさい。」と言いつつ俯いた。それを聞いて男は、引き寄せたあきとをそのまま突き放した。そしてそれ以上の事はしなかった。突き放されたあきとは、しばらくうな垂れていた。そんなあきとに、すかさずけいこは駆け寄り「何するのよ、あんたなんかだいつきらい。」と、男に言い放った。男は、あきとを突き放した後、しばらく俯き、黙っていた。いったいどうしたものかと、子供達は様子を伺っていると、男の肩の辺りがひくひくと小刻みに動いている。そしてそれは次第に大きくなり、やがてわんわんと大声で泣き出した。実の父親であるにもかかわらず、子供達に「おじさん」と呼ばれ、この家の居候と位にしか考えられない自分自身に対し口惜しさでいっぱいだった。「俺はいつた何のために、この家にきたのか・・・。」うな垂れるようにして、男は泣き続けた。さすがに大人の男がこのようなため、子供達はしばらくあつけにとられていた。男に対して、どう声をかけたらいいかわからず、そちらの方を見ないようにただ呆然と立ちすくんでしまっただけであった。

いそひる。いや、父親でそひる？（後書き）

いそろろ。いや、父親でそろろ？

泣き続けている男を背にして、けいこは、部屋の中がかなり薄暗くなっていることに気づいた。「そろそろ電気、つけよっか。」と、あきとに促した。こくりと首を動かして返事をしたあきとは、蛍光灯の下に垂れ下がっている紐を引っ張り、明かりをつけようとした。ちょうどその時、両腕で自分の涙を必死に拭きながら、男がもさつと起き上がった。そして、ふらふらしながら二人のほうへ近づいてきた。二人は身構えて、男が通るであろう通路を遮らないように、それぞれ両端に避けた。男はそのまま通り過ぎるのかと思いきや、そこですとんとしやがみこみ、自分の両手を広げて子供達を引き寄せた。けいこは、「え。ちよつと、何。」と驚き、あきとも「も、もう言わないから。」と、戸惑い少し慌てながら言った。男は無言で、二人を自分の両腕で持ち上げようとしていた。しかし、毎日酒びたりの生活で、ろくに食事もしなかったせい、なかなか持ち上がらない。男の顔は次第に赤くなり、どんどんそれは風船のように膨らんだ。それでもまだ二人を持ち上げようと、ひたすら踏ん張っていた。二人は最初、また自分達に何かをしてくるのではと思っていた。しかし、そんな男を見ているうちに、そしてさらに身近に触れたことで、父親という存在を意識し始めてきていた。突然現れた日のことや、酒びたりの生活を振り返っていた。結局、男は二人を持ち上げることは出来なかった。すると、ふうふうと息を切らしながら、二人をさらに引き寄せ抱え込んだ。二人はそのまま、男のそばでじっとしていた。男は、「大丈夫だ。もう何もしねえ。安心しろ。」と、二人の耳元でそつと呟いた。二人はその言葉を聞き、ようやく安心することが出来た。本当に安心したのだらう。あきとはその父親の肩につかまりながら、わんわんと泣き出した。それを見てけいこも、うつすらと眼に涙を浮かべていた。そしてこれからは、もつという話をしてみようかな、そう思い始めてきた。最初か

ら、全く良い印象など見当たらなかった男であり、けいこは好きではなかった。そして大嫌いと伝えてしまった。けれども男は、今こうして私達を抱え込んでいる。なんだか気持ちになっっていくのがわかった。そしてそうしているうちに、あることに気づいた。わんわんとまだ泣いている弟。その横顔を見て「ちよつと似てるかも・・。」と、一人微笑んだ。すると、そんな三人を包み込むかのように、ふわっと蛍光灯の明かりが灯りだした。けいこは、いつものあの香りを密かに感じ取っていた。

いそろろ。いや、父親でそろろ？（後書き）

少しづつ距離が近づいてきた三人。次回、「思い出の川にて」お楽しみに。

思ひ出の川にて？

やがて本格的な冬を迎え、辺りは一面白い雪で覆われた。路には、人や犬が歩いたであろう足跡がどこまでも続いている。朝日が降り注ぐと電線から滴り落ちる水滴が、ぽたぽたと落ちてくる。家の屋根の端にあるつらはは、次第に己を溶かしながら地面の雪へと落ち、やがて静かに消えていく。そんな朝のことであつた。いつものように、あきとを起こしに行つたけいこは、家中に響き渡る大きな声で「もう。今起きないなら朝ごはんはもちろん、今度からは夕ごはんも次の日も、ずっとなしだからね。お姉ちゃん、毎日あきとを起こしにくるの、本当に大変なんだから。」と、肩まである髪の毛を一つに束ねながら、布団で頭を隠しているあきとに言つた。あきとは、もそもそと動いていた。そして、ぴたとその動きが止まつた時、「え、夕ごはんもないの。」と姉に尋ねた。姉は、えへんと咳払いして、「そうよ。次の日も、その次の日も、ずっとないよえへへへ。」と、不気味な笑みを浮かべて言つた。それを聞いたあきとは、それはご免だと言わんばかりに、さつと起き上がった。そして頭をぼりぼりと掻き、ふわわと欠伸をしながら洗面所の方へようやく歩いていった。「これは効くわ。」と、少しにんまりしながら、けいこは弟の後姿を眺め思つた。

父親との一件以来、けいこは大人の雰囲気が見え、あの日から日々少し余裕が生まれるようになっていた。それは弟のあきとにも伝わり、姉は以前よりもどこか雰囲気優しくなつたように思つた。父親は、朝はほとんど起きてこない。たまに、子供達が食事を終えて出かける頃起きてきて、「なんだ、まだいたのか。」と言うのが日常となつていた。そして出かける前に食器などを洗っているけいこを見かけると、そのそばへ寄り「いいから、置いておけ。」と言つた。するとけいこは「帰ってきてから洗うのは面倒だから。」と

言うので、まあそれはそうだなと思うようにしていた。しかし最近の父親は、けいこがそう言ってもその手をそつと掴み、「いいから、俺に任せとけ。」とけいこに強く伝えた。最初の頃は、「何するのよ。」と反発し、けいこはその手を振り払いつつ、出かけて行くのが常であつた。父親は日々そうした後も、二人が出かけて行つたのちに食事を済ませ、三人分まとめて食器を洗つていた。すると最近では、「ありがとう。それじゃあ、行つてきます。」とけいこは、素直に出かけていった。「全く。あいつは、母親そっくりだな。」と、一人笑みをこぼしながら、けいこが用意した朝食を採つた。

そうした日々を送つて徐々にお互いの気持ちを確認し合いながら、冬を越し、やがて春を迎えた。あきとは徐々に早起きするようになり、最近では父親と共に、朝食の準備をするようになっていた。逆にけいこは、あきとに起こされるまで眠つていた。あきとは、「お姉ちゃん、いい加減起きてよ。」と言いながら、姉の布団を捲ろうとそれをひっぱりながら言つた。今までとは逆の立場である。姉は、「ううん。もう少し・・・。」と、頭を布団にすっぽり覆うようにしていたため、あきとは、にこにこしながら「お姉ちゃん。朝ごはん、お姉ちゃんの分食べといたよ。」と言つた。すると姉は、「え。うそでしょ。」と言い飛び起きて、台所の方へ駆けていった。あきとはそれを見て、「大丈夫だよ。朝ごはんは、これからだから。あははは。」と、姉の背中に向かってげらげら笑つた。姉は真顔でくると振り返り、「あきと。やつたな。」と、笑っている弟の後ろに回り込み、さらに懲らしめようと、あきとのわき腹辺りを両手で抱え込むようにくすぐつた。するとあきとは、「ぎやははは。ひひひい。はあはあ。もうやめてよう。わははは。」と、笑いの頂点を迎えていた。それを聞き、姉は手を休め「ふん。解ればいいのよ。」と、勝ち誇るように言い、その場を去つた。その騒ぎをやれやれと始終見ていた父親は、「おおい。いつまでやってんだ。いいから飯出来たから食つてしまえ。」と、大きな声で二人に言つた。「はあ

い。」と、二人声をそろえて父親に答え食卓に向かった。

それぞれ食卓に座り、けいこは父親とあきとが用意した食事を食べ始めた。今日の朝食の献立は、ご飯、豆腐とわかめの味噌汁のほか、焼き魚と漬物であった。父親は、魚の焼き加減がうまくいったので、「けいこ。どうだ。うまいだろ。この魚。」と、得意げに言った。確かに、表面には適度に焼き目が付いていて、それとは対照的に、中身はふんわりとした食感でおいしかった。けいこは、「うん。おいしい……。かも。」と、やや照れながら父親に言った。そのけいこの反応が父親は嬉しかったようで、「な。そうだろう。」と、わははと笑いながら上機嫌で言った。そして続けて、「俺は魚を焼くのも得意だが、捕るのもうまいんだぞ。」と、二人に誇らしく言った。するとあきとが、目を丸くして「え、本当。じゃあ、今度みんなで魚釣り行こうよ。」と言った。「よし、いいだろう。」と、父親は腕まくりして「それじゃ、今度の休みの日にでも行ってみるか。」と、二人に提案した。あきとはとても喜んでいた。しかし、けいこは別にどっちでもいいやというような雰囲気でも何事も返事をせず、ただ黙って食事を続けていた。そんな姉の様子もお構いなしに、あきとは「じゃあさ。あそこの川で釣ろうよ。」と踊るような気持ちを抑えて、父親に問いかけた。すると父親は、「ああ。いいぞ。」と自信たっぷりに答えた。けいこは、ただ黙って二人の会話を聞き、そのうち食事を終えた。

思い出の川にて？（後書き）

父親との魚つり。いや、魚捕りになるのであろうか。けいこは、
なんだかあまり乗り気ではない様子。そのけいこの想いが明らかに。
次回、思い出の川にて？。お楽しみに。（なお、最終話までカウン
ト3となりました。）

思い出の川にて？

魚は川を自由自在に行き来する。それらは大抵餌を見つけた時に、口先で二度三度突付く。それでもそれに変化がなければその後、一気に喰らい付く。そういつた習性があるため、これを知っている釣り人はよく釣れる。浮きがひよこひよこ動く度に、竿を上げ下げするようだとなかなか釣れない。あきとは、昨日父親から聞いたことを思い出しながら、明日のことを考えていると楽しみで仕方がなかった。ただ、釣竿がなくても釣れるといった父の言葉。いったいどうするのだろうと気になっていたが、それも楽しみだと布団に包まり、ごろごろとしばらく動き回っていた。しかし、そのうちに眠りについた。

翌朝、朝食を終え家事を一通りこなしてから、三人はあの川を目指して歩き始めた。あきとは、鉄製のスコップとタコ糸、けいこは裁縫箱を入れたバケツをそれぞれ持ってきた。父親は、手ぬぐいを首に引っ掛け、手にはあの風呂敷を持つてすたすたと歩いた。あきとは父親が持つている、その中身が気になったので「何が入っているの。」と尋ねた。すると父親は、「だ、大事なものだ。」と少し照れくさそうに言った。あきとは、くるりと後ろを振り返り、けいこのそばに来て「お姉ちゃん。あの中身なんだと思う。」と、なんだか自信たつぷりに尋ねた。けいこは、「あれってさ。初めて家に来た時に持つてきた風呂敷だよ。なんだろう。そうだ、川に行くから服が濡れてもいいように、きつと着替えが入っているんじゃない。」と、これしかないだろうと言わんばかりに、自信に満ちて答えた。するとあきとは、にひひと笑いながら「あの中にはねえ、大事な物が入っているんだってさ。だから、きつと魚にあげるとびっきりの餌が入っているんだよ。絶対そうだよ、だから捕れるって言うてたんだよ。」うんうん、と一人で頷きながら、けいこに懸命に

解説していた。けいこは横目でそんな弟を見やりながら、途中で切り上げた。そして、父親の方へと歩いていった。あきとがそれに気づくと、「あ。ねえ、待ってよお姉ちゃん。絶対そうだからね。」と、大きな声を張り上げた。半分呆れた様子で、はいはいとそのまま歩きながら、けいこは弟の方へ片手を横に振って返事をした。あきとは顔を膨らませぶつぶつ文句を言いながら、父親達の後を追いかけた。

しばらく歩くと、いつもの川が見えてきた。辺りはすっかり初夏の装いとなり、緑色に染まった川のほとりには、太陽の日差しと共に小さな蝶や鳥達があちこちに飛び交っていた。耳を澄ますと、暖かい風が吹き抜ける音や、ぱしゃぱしゃと水の音がする。そして時折、ぴいぴいと鳴く鳥達の声も聞こえた。そんな陽気の心地よさを感じていた時、けいこのそばをあきとはいきなり走り出した。ちょうどその時、風が吹き抜け、けいこの帽子を飛ばしそうになった。けいこは、片手でこれを抑えつつ「ふう。良かった。」と、溜息をついて言った。そんな姉の様子など一切お構いなしに、ぴいぴいと鳥達の真似をしながら、あきとは橋を一気に駆け抜け、渡ったところで立ち止まった。「まったく、もう。はしやぎすぎよ。」と、けいこは父親の後ろから小声ではそぼそと言った。「それにしても・・。」と、けいこは続けて言おうと思ったところで躊躇した。釣りをするのに釣竿がない。そして、なんだか父親はその背後の様子からは、あまりやる気があるように感じられなかった。父親はくると振り返り、「うん、どうした。」とけいこに尋ねた。けいこは、「ううん。なんでもない。」と静かに呟いた。父親は、「よし、それじゃ下に降りるぞ。」と、橋の手前の横道から下へと降りていった。けいこも父親の後に続いた。あきとは、一人で橋の先に行ってしまうていたため、「なんだよう、こっちはないのかあ。」と、ぶつぶつ言いながら二人の後を追いかけた。

橋の下に降りると、大きな石が一つあった。その上にそれぞれ持つてきた荷物を置いた。「それじゃ、あきと。お前の身長より長い、なるべく太い木の棒を探してきてくれ。」続けて、「けいこは、スコップで近くの土を掘り返してくれ。」と二人に伝えた。あきとは、「うん、わかった。」と言い、ぴよんぴよんと跳ねながら探しに行った。けいこは父親の話聞き、いったい何のためにそうするのか全く検討もつかなかった。それなので、「別にいいけど……。それでどのくらい掘り返せばいいの。」と、父親に尋ねた。すると父親は真顔で、「そうだな。餌が見つかるまでだな。」と、けいこに言った。するとけいこは、「え……。もしかして、私の仕事は餌探しの。もしかして、ミミズとか。」と、心配そうに言った。父親は、にこにこしながら「そうだ、その通りだ。ちよつと行つて来てくれ。俺はその間に、竿に付ける道具を作っているから。」と持つてきた裁縫箱の蓋を開け、風呂敷に手をつ込みペンチを取り出して言った。けいこは、引きつった表情を浮かべながら、咄嗟に「絶対嫌よ。私、ミミズだめ。私がそれやるから、代わりに行ってきてちょうだい。」と、父親に大きな声で言った。父親はそんな必死なけいこの様子を見て、笑い転げていた。「わはははは。お前、ミミズだめなのかあ。それは全く意外だな、わははははは。」それを聞いたけいこは、顔をぶくつと膨らませ顔を真っ赤にしながら、「そうだよ、し、知らなかったの。私、ああいうのダメなの。何、そんなに笑わなくなつていいじゃない。」と、むくれて言った。父親は、「ああ、そうだな。はははは。いやあ、意外だな。」と、持つてきたペンチを片手でくるくる回しながら言った。しばらく下を向いていたけいこは、静かに父親の目を睨み付け「いいから、それでいいでしょ。もう、笑い方があきとにそっくりだから腹立つわ。」と言い、父親が持つていたペンチを奪い取った。「わかった。わかった。それでいい。でもお前、道具作れるか。」と、父親が言った。「わかるわけないじゃない。教えてよ。」と、けいこは当然といった感じで、父親に言った。「仕方ないな。それじゃ、まずこのタコ

糸が釣竿につける糸だ。」「と、持ってきたタコ糸をくるくる回してほどこながら言った。「そして、ここに重りと浮き、さらに餌をつける針をつける。それをこいつに通して釣りの始まりだ。ここまでわかるな。」「と、父親はけいこに尋ねた。けいこは、「う、うん。」「と、眉間にしわを寄せながら返事をした。その様子を見て父親は、これはちよつとけいこには難しいだろうなと思ったので、「わかつたな。それじゃまず、大きめなボタンをこの裁縫箱から探して、それからちいさな小石をこの接着剤でくっ付けておいてくれ。いいか、糸が通る部分は空けて置けよ。いいな、頼んだぞ。俺は餌を探してくる。」「と言い、スコップとバケツを持って出かけてしまった。残されたけいこは、「こんなの簡単よ。しかし笑いすぎじゃない。何よ、もう。さつさと作っちゃえ。」「と言いながら、注文通りの品物を作り始めた。

けいこは、あまりにも自分の作業が簡単だったので、あつという間に作り上げた。ボタンにつける小石は、自分の小指の先ほどの小さな物を取り付けた。やがて長い木の棒を肩に携え、あきとが帰ってきた。「あれ、どっかいつちゃったのかな。いいもの見つけたよ。これをきつと竿にするんだよ、お姉ちゃん。」「あきとの倍はある木の棒を、肩からゆっくり下ろしてそれを眺めながら言った。けいこは、「ねえ、聞いてよあきと。お姉ちゃんにミミズ捕ってこいって言っただよ。だからはつきり嫌だって言っただ。」「あきとは目を丸くして「え、それで。」「と、姉に尋ねた。けいこは続けて「それならさ、あきとみたいにげらげら笑い転げてさ。それがあまりにもあきとにそっくりで腹が立ったから、これを作ることにしたんだ。」「と、顔を赤らめて言った。するとあきとは、「え、じゃあミミズが餌なんだ。なんだ、あの風呂敷の中身には餌なかったんだあ。」「と、残念そうに言った。その弟の様子を見てけいこは、「もう、そういうことを言いたいんじゃないの。だから、笑い方が・・・。」「と、けいこが言いかけた時、「おおい。」「と二人を呼ぶ大きな声が

した。二人が振り返ると、バケツとスコップを上に掲げた父親の姿があった。「どうした、お。これはなかなかいい木の棒だ。」と言
い、あきとの頭を撫でながら言った。続けて「重りはどうした。う
ん、まあいいだろう。」と言った。「簡単よ、こんなの。」と、け
いこは得意げに言った。あきとは、下を向いてえへへと鼻の下を掻
いていた。

父親は、二人に説明しながら釣竿を作り始めた。あきとが探して
きた木の棒は、枝をそぎ落とし、先端には持ってきた工具で小さな
穴を開けた。そしてそこに、タコ糸を通し先端を団子結びにして固
定した。さらに片方の先端には、大きめなボタンを一つ通し「この
くらいかな。」とそこで接着剤をつけ固定した。その後、残りの部
分から、けいこが作った重りを通した。父親は「残るは針だな。」
とぼそつと言い、裁縫箱から取り出した待ち針を一本取り出し、先
端をペンチでU字に曲げ糸を巻きつけた。「よし、出来たぞ。餌を
つけるか。」と言い、父親はバケツの土をかき分け一匹のミミズを
掴んだ。「いいか、この餌のつけ方も重要なんだぞ。」と、二人に
言い器用に針の先端の形通りに取り付けた。あきとは、「へえ、そ
うやってやるんだ。」と感心していたが、けいこは顔を背けていた。
父親は、「よし。これでようやく釣りが出来るぞ。あきと、頑張れ
よ。」と言い、餌の付いた釣竿を手渡した。「やったあ。大きい魚
釣ってやる。」と、意気込んであきとは針を川面に投げ込んだ。「
私はちよつと休むから。」と、けいこは木の日陰で休むことにした。
父親とあきとは、「そうだ、よし浮きが沈んだぞ。今だ。引き上げ
ろ。」「え、何。何。うわ、ちくしょう。」などと言いながら、悪
戦苦闘を繰り返していた。

やがて昼になり、一度休憩することになった。父親は持ってきた
風呂敷の中から3個のおにぎりを取り出し、「ほら、食べる。」と
二人に手渡した。おにぎりは大きな丸型で、のりで包んであった。

「おにぎり持つてきたんだ。」と、二人は驚きそのうち食べ始めた。父親も食べながら、「いいか、あきと。昨日言っただように浮きが動いたら少し待て。しばらくして、一気に下に沈んだら思いっきり上に引き上げる。いいな。」と、あきとに伝えた。あきとは、「うん。そうしようと思っっているんだけど、浮きが動くとき引き上げなくなっちゃうんだよね。」と、照れながら言った。「そこを我慢しろ。いいな。そうすれば絶対釣れる。」と、口をもごもごと動かしながら父親は言った。「あきとは、意外とせっかちだからねえ。ふふふ。」と、けいこは意味深に微笑んだ。それを聞いたあきとは、「今度は大丈夫だよ。絶対釣ってやるさ。なんだよ、お姉ちゃん。笑うならミミズ、ほっぺたにくっ付けるぞ。」と、片方の手をバケツに突っ込んで言った。するとけいこは、「うそ。笑ってない。あきと、頑張つてね。」と、引きつった笑顔であきとに言った。その二人のやりとりを見ていた父親は、大きな声で笑っていた。さらに草や木々も、かさかさと密かにざわめきだした。三人の動きに合わせるかのように、細かく左右に動きだしていた。

思い出の川にて？（後書き）

いよいよ魚釣りが始まった。三人の収穫は果たしてどうなるのであろうか。そして、父親の風呂敷の謎。次回、けいこの苦悩。お楽しみ。最終話まで、残り2話となりました。

けいこの苦悩

昼食を終えた三人は、再び魚釣りを始めた。あきとが竿を投げ入れてしばらくすると、ボタンが一気に下に沈み竿が激しく曲がった。「よし、今だ上に引き上げる。いいぞ、かかったぞ。いいか。落ちて着いてそのまま引き上げたままにしろ。ようし、いいぞ。」と、父親は語気を強めた。あきとは、「う、うん。こらあ。あんまり動くな。」と、水中で動き回る魚と格闘していた。けいこはその時、ごくりと息を飲んだ。次の瞬間、ばしゃんと大きな水をはじく音と共に、一匹の大きな魚が顔を出した。父親は「よし、今だ。おもいきり引き上げる。」と指示し、あきとは一気に竿を持ち上げた。すると、大きな魚が水面から浮き上がり、やがて土の上でぴちぴちと尾で地面を叩きつけながら動き回っていた。「やったあ。でかい。釣れたよ。」と、あきとはそれを見て、満面の笑みを浮かべて言った。「よっしゃ。でかした。」父親は、得意そうに針を外し尾びれを持ち上げ、あきとに言った。けいこもそばへ近寄り、「うわあ。結構大きいの釣れたね。あきとすごいよ。」と、弟の健闘を称えた。あきとは照れながら、「えへへ、やったよ。でも、この竿や餌も良かったんだよね。お父。」と、父親に言った。すると父親は、「そうだな。」と言い、しばらく間を置いて、思い出したかのように続けて「お父か……。いいなそれ。」と、こぼした。それで気づいたのか、あきとはさらに照れくさくなっていた。するとすぐさま、「ねえ、そういうば釣竿なくても魚、捕れるんですよ。」と、あきとは父親に詰め寄った。父親は得意げに、「おう。捕れるぞ。やってみるか。」と言い、自分が履くズボンの裾をひざまで捲くり、ばしやばしやと川へ入っていった。そして獲物を追いかける父親の後姿は、まるで魚の尾びれが動くような動きをしていた。あまりうるさくするものだから、魚達は遠くへ行ってしまった様だ。水はとても澄んでいた。魚は当然のことながら、水の中を住み家としている。

人間は、地上を住み家としている。当たり前だが、魚は地上では生きられなく、人間は水中では生きられない。水辺で人間などが騒ぎ出すと川の魚は一度、岩の陰などへ姿を隠す。そして静かになった頃、何事もなかったかのように再び泳ぎだす。「ねえ、お父さん。もうそれだけ大きい魚釣ったから、もう帰ろうよ。」と、けいこは言った。「お前は、お父さんか・・・。」と、それを聞くと同時に、自らの動きをぴたりと止めた。そしてその場でじっと、何かを考えるようにしばらく立ち止まった。父親は、二人に対して確かな手ごたえを実感していた。今までの出来事が一気に父親の脳裏に浮かび上がり、その目にはうつすらと涙が浮かんできた。父親はそれに気づかれぬよう、わざと水面に顔を近づけ急に顔をわざと洗い、ばしやばしやと何度も濡らした。子供達は一瞬、いったいどうしたのかと思ったが、その姿を見ているとなんとなく父親の気持ち伝わるような気がした。やがて父親はすくつと起き上がり、「いやあ、冷たくて気持ちいいぞ。は。ははは。」と、何事もなかったかのように不自然に言った。二人は、「はやく魚、捕まえてよう。」「あきとが一匹釣ったから十分でしょ。もう、帰ろうよ。」と、それぞれ父親に言った。父親は顔を手ぬぐいで拭きながら、「それもそうだな。これだけの大きさ一匹あれば十分か。帰るとするか。」と、川から岸へと上がってきて言った。あきとは、「いやだよ。早く捕つてよう。」と父親に言ったが、「また来た時捕つてやるさ。ははは。」と、父親は上機嫌で言った。するとけいこは、あきとが釣った魚を持ち帰るために持ってきたバケツの中の土を、きやあきやあとと言いながら、近くに草むらにそつと中身を空け、川のそばに行き水をくみ上げた。その中に父親が魚を押し込むように入れ、「いくら狭いな。」と言い、続けて「さあ、帰ろう。あきと。」と、ふてくされているあきとの手を引いた。けいこは、裁縫箱やいろいろな道具を片付けようとしていた。裁縫箱は片付け終わり、後はペンチを風呂敷の中に戻さなくてはい、それを手に取りながらちかくにあった風呂敷の袖をそつと広げた。けいこはその瞬間、動きが止ま

った。

その風呂敷の中身は、工具を入れる木箱だった。それにはあの写真が貼ってあったため、けいこは顔を近づけ覗き込むようにして見ていた。すると、それに気づいた父親が近づいてきて「どうだ。なかなかよく撮れているだろう。」と、得意げに言った。けいこはきよんととして、「え。これってお父さんが撮ったの。」と尋ねると、父親は「そうだ。」と言った。続けて、「お前らが生まれる前のお母さんだ。こっちは結婚した頃だな。」と、いくらか照れくさそうに言った。あきとは、まだふてくされていたが、相当気になるようにでちらちら横目で見ていた。「へええ。なんかお母さん若い。私に似てる感じがする。」と、けいこは真剣にその二枚の写真を見つめていた。その様子を見て、父親は笑いながら「まあ、子供だからな。」と嬉しそうに言いながら、「さ。もういいだろ。片付けて帰るぞ。」と、風呂敷をまとめてそれを持ち、歩き出した。けいこは、あきとの手を取り裁縫箱を抱えながら後を追った。あきとは姉に渡された竿を肩にかけ、変わらずとぼとぼと歩き出した。

自宅に付く頃には、すでに日が傾き始めていた。いくらか冷たい風が吹くと、それに合わせて緑色の苗がさらさらと音をたてる。父親は道中、あきとに「さあ、みんなでこの魚を焼いて食うぞ。きつとうまいぞ。あきと、よく頑張ったな。」と、嬉しそうに声をかけた。あきとは、「うん。でも、今度は絶対お父が捕ってね。約束だよ。」と父親に念を押した。父親は、「なんだ、まだ心配してるのか。大丈夫だ。任せとけ。」と、笑顔で答えた。それを聞いたあきとは、ようやく機嫌を直し始めた。その時、「はつくしよい。」と、あきとは、くしゃみをした。「ははは。なんか寒くなってきた。」と父親に言った。父親は、「よし。家に着いたら、まず俺は風呂に

入る。あきと、お前も一緒に入るか。」「と、問いかけた。あきとは、鼻をこすりながら「うん。入る。早く入りてえ。」「と、おどけて言った。その後ろから、「私も・・・。」「と、けいこが静かに言った。父親とあきとは驚いて、「え。お姉ちゃんも一緒に入るの。別にいいけど・・・。」「とあきとは声を詰まらせた。父親は、ただけいこの方を見つめていた。するとけいこは、「はは。ははは。」「と空を見上げて笑い出した。「あきと、一緒に入るわけじゃない。ちよつと言ってみただけよ。ははは。ああ、おかしい。」「とけいこは真に受けた弟をからかうように言った。父親は、ようやくあきとの機嫌が良くなってきたのに、ここでけいこの一言で台無しになるような気がしたので、「なんだ。俺も一緒に入って構わないと思っっていたんだがなあ。まあ、いいや。あきと、家に着いたらすぐに湯を沸かしてくれよ。」「と、あきとに笑顔で伝えた。あきとは下を向いていたが、やがて父親の顔を見て「うん。わかった。任せとけい。」「と言い、「先に行ってるねえ。」「と走って行った。けいこは、「いつもなら、私に何か言ってくるのに・・・。」「と、少し意外な表情を浮かべて呟いた。父親は、口笛を吹きながらそんなやり取りを楽しそうに眺めていた。

家に着くと、あきとは父親に頼まれたように、風呂の準備を進めていた。やがて父親達の姿に気づき、「あ、お父。もうちよつとで入れるよ。」「と言ってきた。父親は、「よし。構いやしねえ。入るぞ。あきと。」「と、風呂場へと向かった。あきとは、「え。だからまだだって。」「と言いながら、その後ろを着いていった。そうだがけいこに一言伝えておくかと思った父親は、くるりと振り返り「おい、けいこ。お前は、魚焼く準備をしておいてくれ。」「と叫んだ。けいこは笑顔で「わかりましたあ。」「と、やけに素直に答えた。父親はその返事を聞くと、満面の笑みを浮かべて「よし、あきと。かかってこい。」「と素っ裸になり、あきとの胸を自分の掌で、ぐいぐ

い押した。あきとは意気込んで「よし。いくよ。」と、父親の腹部目掛けて向かっていった。父親は「どうした、そんなものか。ほら、どうした。」と、あきとを煽った。するとあきとは、これでもかと必死に父親の腹の辺り押した。しかし父親は、全然びっくりとも動かない。あきとはおかしいなと思いつつも、さらに自分の力を出せる限り向かっていった。すると父親は、「お。そうだ。いいぞ。もつと押せ。」と、顔を真っ赤にしているあきとに言った。しかし、そうは言ってもあきとの力では長続きせず、「はあはあ。もうだめ。」と、風呂場の床に大の字で寝転んだ。父親は、「ま、まだまだ負けないぞ。ははは。」と、かるうじて言った。それを悟られないように父親は「よし、もういいだろう。入るぞ。」と、浴槽にさっと跳び込んだ。それを見たあきとも、やがてゆっくり起き上がり、父親の真似をするように浴槽へ入った。湯は少しひんやりするが、寒くはなかった。あきとは、心の中で父親を賞賛した。

二人が風呂から出てくると、あらかじめ食事の準備が整っていたが、魚はまだ焼かないで置いてあった。「じゃあ、私も入ってくるね。」とけいこは、風呂場へと向かった。「あれ、お姉ちゃん。これから魚みんな焼くんだよ。」と、あきとが言ったが「ううん。私はいいや。入ってきちゃうね・・・。」と、風呂場へと向かっていった。父親達は、どこか悲しそうな表情であつたけいこに対して、一瞬気になったが「まあ、いいだろう。おれ達で進めよう。」と父親はあきとに言った。そうだね、と二人は魚の準備に取り掛かることにした。それにしても、あの姉の表情が気になる。あきとは、なんだか不安に思つて父親に「なんか、お姉ちゃんの様子。おかしいよね。」と尋ねた。しかし父親は、「お姉ちゃんか。大丈夫だよ。疲れたんだろ。」と、あまり相手にしないといった様子で、どんどん魚を捌いていった。「なあんか、おかしいような気がするんだよねえ。」とあきとは言いながら、皿の準備や捌いた魚に塩を振ったり自分の

仕事をこなしていたが、あの姉の横顔が妙に気になっていた。やがて魚を焼ける段階となり、父親は「いいか、最初は強火で焼き目をつけるんだ。」と、あきとに言った。あきとは、「どっちから焼くの。」と父親に尋ねると、「好きなほうでいいぞ。」と言った。あきとは、少し考えた。いつも父親が焼いた魚がおいしいのは、魚の皮がぱりつとした食感であったことだと思い出した。そのため、「わかった。じゃあ、皮がついたほうから焼いてみる。」と、魚の切り身をフライパンへ入れた。父親は「よし。おれと一緒にだ。」あきとの頭を撫でながら言った。こうして焼き目が付いたらひっくり返し、今度は弱火で蓋をしてしばらく焼いたら出来上がり、という一連の魚の焼き方をあきとは覚え、さらに実践することが出来るようになった。「うわあ。うまそう。」と、焼きあがった魚をそれぞれ皿に盛り付けている父親の横から、あきとは目を輝かせて言った。「ははは。いい焼き上がりだ。合格だ。」と、父親は嬉しそうに言った。

そしてしばらくすると、けいこが風呂から出てきた。やがて三人は、それぞれの座席で食事を始めた。最初は、昼間の話をして最近のように団欒といった様子であったが、けいこが焼き魚を食べ始めてしばらくすると、その箸を静かに置いた。あきとは先ほどから姉を心配していたのもあり、「どうしたの、お姉ちゃん。」と、一言尋ねた。するとけいこは、ややうつむき「ううん、なんでもないの。」と答えた。次の瞬間、けいこは食器を片付け始めた。それを見て父親が、「どうした。気分でも悪いのか。」と尋ね、けいこの頬を手の中で触れたり手首を軽く掴んでみたが、顔色が幾分良くない他は特別大したことはない判断した。ただその時、父親とあきとは、姉の今日の一日のことを思い出していた。そしてよく考えてみると、姉は釣りにはあまり興味が向かないようだったことや、川にいる時もいつもより静かであったことを思い出した。すると今度はあきと

も、「ぼくも、もうごちそうさま。」と静かに言った。そして続けて、「お母さんは今頃、どこにいるんだろう。川から海へと行つちやったのかなあ。」と寂しそうに、泣きそうなのを堪えつつ呟いた。父親はこれを聞き、やはりと思う他なかった。母親が生前、大好きだった川。そこで母親の骨を流した。きつとそのことが今回の釣りに対して、けいこの気分が進まなかった大部分を占めているのであると。このけいこの表情は今までとは全く違う、深刻なものだ。しかし、だからといって、ここで子供達の悲しみに共に付き合うのではなく、自分がここへ来た意味がない。父親はこの時初めて、けいこの苦悩に立ち向かう必要があることに気づいたのであった。

けいこの苦悩（後書き）

あの川で釣った魚を目の前にして、けいこは食事をやめた。その苦悩に父親が立ち向かう。子供達に、きちんと現実を見つめる術を伝えることが必要と決断した。次回、最終話。その笑顔、きつと届く。お楽しみに。（次回で、いよいよ最終話となります。）

その笑顔、きつと届く。

母親が好きだった川へ流した骨。そこで育ったであろう魚。けいこ達は、焼き魚を目の当たりにして、突然そのことが頭をよぎった。二人は、今までそのことを深く考えてはいなかった。父親と遊びに行く、そしてそこで魚を捕まえるのだと、ただそれだけであつた。しかし、いざ食した時、居た堪れない気持ちになつてしまい食事を続けられない、けいこやあきとがそこにいた。けいこ達はまだ、母親の死を完全には受け止めきれていない。父親は、まあ無理もないかと思いつつも暫し考えた。ここで三人して、泣き暮らすのでは、おれがこの家に再び戻つてきた意味がない。

あいつがおれに送つてきた手紙には、こういう時に子供達二人の力になつてほしいという気持ちがあつたのだらうと、父親は今ひしひしと感じていた。そうでなければ、わざわざ別れた旦那に、自分の死期を含めた手紙を送るはずがない、そう思った。そして、自身を振り返れば、もともと、自分の子供達になんか全く興味がなかった。ただ毎日、うまい酒が呑めれば最初はそれでよかった。よかったはずなのだが、実際にこの家で暮らしてみると、子供達は驚く程、日々成長していく。自分はどうと、酒ばかり呑んでいて働かず、そればかりか家の手伝いも全くしなかった。やろうとも思わなかった。それが共に生活していると、自分には成長している子供達が、とてもまぶしく輝いて見えてきた。そんな光景を毎日見ていたら、自然と家事をやるうという気になつていった。そして実際にやりだすと、結婚した頃をよく思い出していた。子供は最低でも二人は授かりたい。そして、不自由なく毎日を過ごせるように、おれは自分の仕事に精を出す。お前は、うまい飯を毎日作る。そうすれ

ば、まず金に困ることはないし、飯がうまければ、子供達は腹を空かせて家に帰ってきたいと思うだろう。楽しみだなあ……。

一気に父親の思いが脳内を駆け巡り、この状況にもっとも適していることは何なのかを模索していった。そして辿り着いた答えは、二人が残した魚を全て食べつくすことだった。「なんだ。もう食べないのか。それじゃ、全部おれにくれ。」と、父親は言った。二人は驚き、やっぱり人の気持ちかわからないのだろうか、と疑わざるを得なかった。しかし二人は、そんな気持ちを抑えつつ、「食べたければどうぞ。」と、さっと父親の座席にそれぞれ持ち寄った。すると父親は、「うお。これはうまいなあ。やっぱり、川魚は焼くのに限る。」と言いながら、再びむしゃむしゃと食べ始めた。父親の口元は、しばらく動き、ごくりとそれを飲み込むと下を向き押し黙っていた。その目には、涙が薄くにじんんでいるように見えた。あきとは、そんな父親の姿を見ているのが次第に辛くなって、「お父。今日は楽しかったよ。僕、魚釣り、また行きたいよ。」と、静かに言った。すると父親は、「おお。また行こうなあ。」と、魚の骨を丸ごとぼりぼりと食べながら、威勢よく言った。けいこは、そんな二人を横目で見ながら、居間へ向かおうとしていた。ちょうどその時、父親はそれまで持っていた箸を、すっと横に置き「お前達……。」と、二人に問いかけた。そして、口の中の食べものを飲み込んだかと思うと、「あのかなあ。いつまでもめそめそしてんじゃねえぞ。」と、一喝した。父親は、かつて二人が見たものとは比較にならないような、ものすごい睨みへと変化していた。あまりの形相に二人はとっさに目を背けた。父親は続けて、「あのかなあ。お母さんはもう、死んじまっただよ。なあ。どうなんだい。」と父親は、一言一言、語気を強めていき、まるで酒を呑んでいるかのように二人に問いかけた。下を向き、静かにただ黙っていた二人がこう言われた時、なんとなく父親が怒る気持ちがわかるような気がした。父

親は気持ちが収まらず続けて、「だからよお。もう母親はいねえんだよ。それをちゃんとお前らがわかってなけりや、きつと成仏どころじゃないだろうがよ。それでもいいのか、お前らは。あのなあ、酷かもしれないがこれは言っておくけどよお。これから先、お前らのお母さんがいきなり生き返ったりすることなんか、もう二度とあるわけないんだからなあ。」と、二人に言い放った。二人はただ、黙ってその場に立ち竦むしかなかった。

父親にそう言われたあきとは、ふと思った。確かに、いつか母親はふつと現れてくれるのではないか、自分が母親に言い聞かされたことを守ってさえいれば、きつと現れてくれるのではないかと心のどこかで期待していた。けいこは、いや、そうじゃない。実際にお母さんを見たとし、匂いもした。と、なんとかして父親に反論しようと思った。でも、そうであるのだけれど、父親が言っていることもまた、間違いではなく事実であり、さらに現実であることも、けいこはわかつていた。「私はわかつてる。わかつてはいるけれど・・・。」と、けいこは声を詰まらせた。悔しさと怒り、母親の死なんて素直に認めたくなかった当時の気持ちが、今再び溢れだしてきた。けいこはその場で泣き崩れた。しかしあきとは、なんとか必死に泣くのを堪えようとしていた。その目を見開き、「僕はもう泣かない。」と一度きっぱり言った。しかし、すぐに「も、もう泣かないもん。」と言いながらも、自然に涙がぼろぼろとこぼれ出してきた。子供達は母の死から今初めて、素直な感情が溢れ出してきているのであった。

二人の涙は決して、父親への憎しみではなかった。母親の死後、父親と生活出来るようになるまで、二人はいつも気を張って生きてきた。父親が現れた時、正直、どうにでもなれと思ったことも

あつた。ただその父親は、あのおじ夫婦に対して自分達と同じ感情を持つていたことがわかり、嬉しかったことを思い出していた。そんなことを思い出しながら、どうしてあの時、母が死んだ時、あれ程泣いたはずなのに、今でもこうして涙が出てくるのだろうか。自分で抑えようにも抑えきれない。けいこがそう思つていた時、父親は、二人を自分の脇へ呼び寄せ言つた。「あのなあ。お前ら、泣きすぎだろう。」と、苦笑いしながら言つた。二人は泣きじゃくつて、返事もままならないほどであつた。ひくひく動くそんな二人の肩をそつと抱き寄せ、父親は「お母さんは、俺のことを贈り物だと言つたんだよな。」と、改まつて二人に問いかけた。二人は、泣きながらも「うん……。」と首を縦に振つた。すると、「あのなあ。ある日、俺のところにあいつから手紙が来たんだ。」と、父親は二人の頭を撫でて言つた。けいこは、「あいつつて、お母さんのこと。」と問い返すと、「ああ、お前達のお母さんだ。」父親は続けて、「そこにはいろいろと、心配事が書いてあつてよ。それがまあ、あまりにも長い文章だったもんで、途中で読むのを止めようかと思つていたんだがよ……。」と言葉を濁し、天井を見上げた。その後「だがな。その手紙の最後の文に目に止まつた時、お前達の所に行こうと思つたわけだ。」と父親は言つた。二人は泣きながらも、その最後の文章が気になつていた。そして静かに「それが、これだ……。」と父親は二人の頭を掴み、くると自分の方へ向けて、につこりと優しく笑つてみせた。けいこことあきとは、間近で父親の笑顔を見たのは初めてなので戸惑いを隠せなかったが、その表情は、何故か不思議と二人を落ち着かせた。父親は、「な。そういうことだ。お母さんはな、お前達の笑顔が大好きなんだとよ。」と、どこか照れながら二人に伝えた。その父親の話を聞き、子供達は再び泣きじやくつた。「いつまでも泣いていては、つまらんさ。」父親は、二人の肩を力強く抱き締め言つた。

それからしばらくたったある日のこと。「お父。ねえ、お父。起きてよ。」と、あきとは父親の布団を引っ張って言った。「ああ……。」「と、父親は全く起きそうもない声で返事をした。あきとは急ぐように、「仕事、今日から行くんでしょ。間に合わないよう。」と言った。すると父親は、「仕事だと……。しまったあ。」と言ったかと思うと慌てて飛び起き、着替えを済ませて急いで出かけて行った。けいこは、皆の弁当を用意している途中だった。父親がばたばたと出かけて行ったので、あれ、もうそんな時間になるのかなと不思議に思った。時計を見ると、まだ出勤時間までには十分余裕があるのにも思いながらも、けいこはその続きをしていた。するとその後すぐに、あきとが慌てた様子で近くに來て何かを姉に話そうとしたが、一足先にけいこが、「お父さん、随分早くに出かけたね。仕事、久々で張り切っているのかな。」と尋ねた。するとあきとは「お父、行っちゃったよう。どうしよう。」「と、息をきらしながら言った。姉はそれを聞くと顔色を変えて、「え。どうしようって何あきと。お父さんに何かしたの。」「と、詰め寄り言った。あきとは「お父を早く起こそうと、ちょっと演技しただけだよ。そしたらお父、しまったあって言うて行っちゃった……。」「と、しょぼくれて言った。姉は、きつと父親は、あきとの演技にやられたんだなと思うと、なんだか笑えてきて「ははは。大丈夫よ。きつと一度、帰ってくるよ。」「と言った。ちょうどその時、玄関の方でがらりと音がした。そして父親がどしどしと台所に向かって歩いてくる音が、次第に大きくなってきた。「あーきーとー。」「と、低い声で名前を呼びながら、けいこの予想通りに父親がそこに現れた。「き、来た。」「あきとは、さつと姉の後ろに姿を隠した。「あーきーとー。やってくれたなあ。」「と言いながら、けいこの後ろで様子をうかがっているあきとを抱えた。あきとは、「放してよう。」「と言いながらも、顔はにこにこしていた。けいこは、「遅刻はしないから、もういいでしょ。お父さん。さあ、弁当の準備は出来たから、朝ごはんにしよう……。」「って、全然聞いてないし。」「あきとは、父親の攻

撃を受けていた。「きやはははあ。くすぐりたいよう。やめてえ。
「けいこは、自分の話を全く聞いていないことに腹がたち、あきと
を両腕で抱えている父親の背後に回り込み、攻撃を開始した。する
と、父親は「わははは。こら、やめろ。はははあ。」と笑うと、
思わずあきとを手放してしまった。あきとは、すぐさま姉と合流し
「お返しだい。」と言いながら、姉と二人で父親に向かっていった。
「それ。それ。」「ぎやははは。やめろ、やめろ。こらあ、やめ
い。」

こうして家には絶えず、誰かの笑い声で包まれていた。いつ
も笑ってくれた母親に、この笑顔が届きますようにと、それぞれの
想いを込めながら。

その笑顔、きつと届く。（後書き）

< 作者より >

「真実とは。」 短編小説は、今回の投稿を最後に無事、完結となりました。短い間でしたが、読んでくださった方々、ありがとうございました。

この物語は、フィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7123x/>

真実とは。

2011年11月30日11時45分発行